
有希子・その愛

滝龍太郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

有希子・その愛

【Nコード】

N7563I

【作者名】

滝龍太郎

【あらすじ】

高校を卒業と同時に氷川良介と同棲を始めた有希子は、良介の妻を演じていたが、良介の浮気が発覚し有希子が家を出てしまう。

そして、十年の月日が流れ、町で偶然有希子と良介が遭ってしま

う。

二人は抱き合い、過去を忘れるが・・・。

街路樹の色はすでに真つ赤に色づき、歩道には絨毯を引いたように落ち葉が引き詰めていた。

街路樹の間からこぼれている淡い光の中、氷川良介は落ち葉の絨毯の上を歩いていった。

ときおり冷たい北風が吹き、落ち葉が風に舞っている。

寒いせいか、歩いている人の姿は数える程度である。

良介は街角を曲がり、遠くの信号を見た。

青になり、何人かの人がちらに向かっていた。

皆、寒そうに襟を立て、背中を丸めるように俯き加減に歩いている。

男の人が二人に女の人が一人。

そして、すれ違った。

ん？

何かを感じたのは、良介とすれ違った女性の方であった。

その女性は、すれ違って一、二歩行った所で立ち止まり、良介の方に振り向いた。

良介は何事もなかったように歩いている。

が.....。

女性の視線に何かを感じたのか、十数歩行った所で立ち止まり、ゆっくりと女性の方に振り向いた。

その距離は、過去を縮めるには格好な距離であった。

(有希?)

振り向いた先に、遠慮がちに立って良介を見ている女性の顔。

その女性は、眩しい物を見るような顔をしている。

一步、二歩、良介が近づいた。

足の速さが徐々に増して行く。

その瞬間、十年前の過去が走馬灯のように、良介の頭の中を駆け巡り出した。

十年前、大学三年になった良介は、高校を卒業したての有希子と同棲生活を始めた。

二年間の付き合いの果て、親を説得し、良介のアパートに有希子が転がり込んだのである。

一DKという狭いアパートだが、二人で寄り添って生活して行くには十分な広さであった。

良介は昼間大学に通い、夜は場末のクラブでアルバイトをしていた。

有希子も遊んでいるわけにはいかず、パート勤めをし、妻さながらの生活を送っていた。

そして、一年が過ぎようとしていた。

その間、波風が立たなかつたといえは嘘になるが、大きないざこざはなく過ごして来れたが、決定的な事が起こってしまったのである。

良介のアルバイトは、クラブで皿洗いや雑用をしていた。

若い良介にとって、有希子とは違う、クラブでの大人の女を常に見ていて、興味を持つのは自然の成り行きであった。

その日、仕事が終わって帰り支度をしていた良介に、ホステスのみどりが声を掛けて来た。

「ねえ、良ちゃん。たまには私とデートしようよ」

初めてなのにたまにはという言い方はおかしいが、みどりというホステスは三十歳前後の色気をプンプンとさせた女である。

かねてからその色気には当てられており、良介は羨望の眼差しでみどりを見ていた。

そのみどりからの誘いを、千載一遇のチャンスとばかりに良介が乗ってしまったのである。

当然の事ながら二人はホテルに入り、甘いひとときを送ってしまった

った。

「良ちゃん、送って行くわ」

酔いが醒めたのだから、良介を助手席に乗せ、みどりがハンドルを握った。

「良ちゃんの彼女、うんと若いって言ってたわよね」

世間話の中で、年下の女と同棲している事を以前に話した事がある。

「二つ下だけど．．．」

みどりは良介よりかなり年上のためか、元来若い女が気に食わないのである。

「そう．．．、可愛くてしょうがないのね」

みどりが嫌味を言う。

「そんな事はないよ」

良介が反発するが、

「どっちでもいいけど、私みたいな色気はないでしょう?」

と言って、良介の言う事など気にしてなく、赤信号に停まったと同時に、良介の首に腕を巻き付け唇を貪って来た。

プップー。

後続車のクラクションが鳴らなければ、いつまでもくっついていてたであろう。

良介とて満更ではないのである。

この甘みな快感、大人の女の色気。

いつまでも一緒にいたいのは良介だけでなく、お客にいたっても同じ事だろう。

良介はそんな事を考え、自分の住むアパートまで送ってもらった。当然、いつもの時間と違うので有希子は心配になり、アパートの玄関を出たり入ったりして気を揉んでいた。

その時、一台の車がアパートの前に停まった。

赤いスポーツカーである。

良介のわけではないと決めてかかっていたが、何となく胸が騒ぎ、

玄関に入るのをためらって二階の踊り場から車の中を覗いた。

暗くてよく見えないが、助手席の男に運転席の女が抱き着いているのが見えた。

(どこの人だろう)

アパートの住人が送られて来たのだろうと思っていた。
が.....。

助手席から降りて来たのは、まぎれもなく良介だったのである。

(うそっ、そんな事なんて)

小指の先っぽ程も疑ってなかった有希子にとって、これは大変なシヨックであった。

毎晩、水商売の女性たちと接触しているので心配事は当然あったが、良介の態度を見ているとそんな事は絶対ないと確信していたのである。

それが、目の前でとんでもない事を目撃したのである。

当然の事ながら、遅くなった理由は純真な有希子にとってもすぐに分かってしまった。

(許せない)

上から見られているとも知らず、良介は走る去る車に手を振っている。

そして、何事もなかったように、良介はアパートの階段を上り始めた。

(うっ！ 有希！)

上を見上げると、有希子が茫然とした顔で良介を見ていた。

「だあれ？」

有希子の声が震えている。

「クラブの人」

良介が恐る恐る言った。

「いつもああいう事をしているの？」

有希子の声が荒くなった。

「えっ？」

見られてしまったのかと、良介がまずいという顔をした。

「いや！」

有希子は険しい顔をして良介を見ると、踵を返して玄関の中に駆け入り、財布と鍵を持ってアパートを飛び出した。

良介の制止も利かず、有希子は暗い町の中へ走って行ってしまった。

翌日、良介のいない時間を見計らって、有希子は自分の荷物を取りに来た。

短い手紙を添えて、鍵を玄関ポストに投げ入れた。

2

有希子の目につつすらと涙が滲んでいる。

良介と別れた後の十年間、苦しんだ心の現われであった。

「有希！」

良介の腕の中に有希子が包まれた。

この十年間、有希子は良介を忘れるために色々と努力をしていた。実家に帰ってからはフルタイムの仕事に就き、体を酷使する事で頭を空にし、良介の事を考えないようにしていた。

他の男に対しても同じで、頭の中から消していた。

しかし、美貌の有希子を放っておく事は許されず、職場の同僚たちから幾度となく誘いの言葉が来ていた。

大手デパートの仕事は人も多く、色々な部署からの誘いもあって有希子は困惑していた。

せっかく良介を忘れようとしていたのに、男からの誘いで良介の面影がチラチラと見えてしまうのである。

そんな誘いに負ける事が幾度かあったが、決して一線を越す事はなく、女としての寂しさはより一層のものになっていた。

好きな人も出来たが、やはり一線は越えられず、男の方から去っ

て行った。

(なんでなの?)

常に良介の事が頭から離れられない。
消そうとすればするほど鮮明に蘇って来るのである。

(どうしたらいいの)

二人で出掛けた近所の小さな公園。

銭湯の帰りに寄った屋台のおでん屋。

雪の夜、喧嘩をして飛び出した有希子を、迎えに来てくれたあの
心配そうな良介の顔。

お金がなくても、二人で寄り添って生きて来た思い出が、次から
次へと頭の中のスクリーンに映し出されて来る。

一人の部屋は、時として残酷である。

(会いたい)

すでに五年が過ぎていたが忘れる事が出来ないでいた。

最初の頃は憎しみでいっぱいだったのだが、いつしかそれは薄れ
てしまい、良い思い出だけが残っていた。

仕事中でも、お客様の中に良介に似た人がいると執拗に目で追っ
ている。

しかし、實際来たらどうなるだろう。

(よそよそしくなるかしら)

そんな事を考えていると楽しくなるのだが、

(彼女と一緒にだったらどうしよう)

などと、いらぬ心配をしていた。

そんな妄想が一時の気休めになるのだが、ふと現実に戻され
た時の空しさは、計り知れないものがあつた。

これではいけないと自分に言い聞かせてはいるものの、次の一歩
がなかなか出ないでいた。

そんな時、有希子も満更ではない同僚の柳田からドライブに誘わ
れた。

この手のものは全て断っていたのだが、良介を断ち切るには絶好

の機会とばかりに承知をしたのである。

柳田は優しく思いやりのある好青年で、有希子とはお似合いの力
ツプルである。

このドライブが良いきっかけになればと有希子は思っている。

柳田も有希子との初めてのドライブに、何かを得たいと期待をし
ていた。

「海の幸が好きだと言っていましたよね」

柳田の弾んだ声が車の中に響いた。

「ええ」

遠慮がちな有希子は小さく頷いた。

「伊豆に行つて美味しい物を食べたいと思つのですが、いいですか
？」

柳田も遠慮がちに喋った。

「まあ、嬉しいわ」

有希子の声も弾んだ。

「よし、決まり」

柳田は、嬉しそうな顔をして車を発進させた。

東名高速に入り、柳田がすぐに有希子を気遣った。

「一つ目のサービスエリアに停まりますので、トイレ休憩しましよ
う」

「はい」

有希子は素直な気持ちで言葉が出た。

そして、サービスエリアを出ると、

「いつでも言つて下さいね。どこでも停まりますから」
柳田が如才なく言った。

「はい」

車は東名厚木インターから小田原厚木道路に入った。

そして、途中から西湘バイパスに入り、湯河原、熱海と過ぎ、伊
東に入った。

伊東から山の手に入り、伊豆シャボテン公園に寄り、車を降りて

中を散策した。

柳田は色々と話しかけて来たが、有希子は当たり障りのない話しかしなかった。

その都度、柳田は遠慮がちにはしてくれるが、柳田とて、ここまですぐに近づくには、少なくとも自分に好意を寄せてくれているのだと自負し、たまに突っ込んだ質問をしてくるのである。

「ごめんなさい」

有希子は自分に正直になれず、柳田の期待を裏切ってしまった。

「いや、謝るのは僕の方です。余計な事を聞いてしまって、申し訳ない」

「ううん、そんな事はないわ。私のはつきりしなくて、ごめんなさい」

二人の事を聞かれても、有希子とすればまだ何も知らないし、今日のデートで柳田という人物像を見させてもらうわけで、早くに何かを言われても答えようがないのである。

そのへんは柳田も分かったようで、自分が焦っているのを反省していた。

それほど、有希子は素直で可愛く、愛しいのである。

色んな人に誘われている事を知っている柳田は、自分に誘われて来てくれた事に、自惚れが先走ってしまった事はいたしかたなかったのである。

「お腹が空いて来たね」

柳田が気まずい空気を変えた。

「そうね、いくらか」

有希子も気持ちを変え、笑顔で応えた。

「いい所があるんだ」

美味しい料理を出してくれる所は、すでにネットで調べてある。海沿いの洒落たレストランに入ると、窓際が一番いい席に有希子を座らせた。

当然のように、美味しそうな海の幸がふんだんに出て来た。

有希子の好きな物だらけである。

柳田の気配りが、有希子には嬉しいほど分かっていた。

しかし、しかしである。

いい車に乗せてもらい、案内され、好きな物を食べさせてくれる。こんな贅沢をさせてもらって感激をしないわけではないのだが、やはり……、違うのである。

(贅沢なんていらぬ)

有希子が心の中で叫んだが、目の前にいる柳田に嫌な顔は出来ず、苦し紛れの笑顔を作って料理に箸を着けた。

(だめだわ)

良くしてもらえばもらうほど、苦しくても良介との楽しい日々を思い出してしまふ。

断ち切ろうとしてここまで来たのだが、逆に強い感情の渦が頭の中から湧き出て来てしまった。

「どうしました?」

不安定な有希子の顔を見れば、誰しもが疑問に思うだろう。

「いや、何も……」

有希子はそう言って席を立ち、

「トイレへ……」

行儀悪いと知りつつも、いたたまれなくなってしまったのである。うつうつ。

涙が自然と出て来てしまふ。

今は消さなければと思っただけでも、良介の面影が脳裏に浮かんで来てしまふ。

(ごめんなさい)

この言葉は、良介と柳田、二人に言ったのである。
有希子の優しさが現れた一面であった。

木枯らしがビュツと吹いた。

良介の腕の中で、有希子が一瞬体を縮めた。

別れ方が悪かったせいか、良介の抱擁は遠慮がちに力を入れず、有希子の肩をそつと抱く程度であった。

有希子の腕は良介の背中に戻っている。

顔は胸にぴつたりとくっついていて。

「ごめん……」

良介がボソリと言った。

あの時の事を謝っているのか、そんな事はいいのにと、有希子は思った。

「何を？」

一拍置いたが、有希子は敢えて聞いてみた。

「俺、結婚したんだ」

はっ、とした。

有希子の心の中で、何かが破裂したようであった。

考えてみると、有希子は今二十九歳、という事は良介は三十一歳。当然といえば当然の事である。

自分みたいに、ずーっと忘れられずにいて、今日まで来たしまつたわけではないのである。

「そう……」

有希子は心の動揺を隠し、静かに言った。

「有希は？」

残酷な質問である。

嘘を付きたかったが、首をそつと横に振った。

「そうか。俺のせいかな？ 男が嫌になつたんだろっな」

（違うわ。良介じゃなければだめだったの）

有希子は言葉に出したかったが、出したところで今更どうなるわけではないので、ぐつと息を呑んだ。

「ばかだったよ」

「違うわ。良介が悪いんじゃないわ。私がいけなかったの。もう少

し大人だつたら良介を許せたらうし、良介もあんな事はしなかつたと思う」

この十年間で、有希子は随分と男の勉強をさせられて来た。

素直ゆえ男に誤解された事は数あれど、常に自分というものを見失いで来た事は胸を張れた。

そこで得た、一歩前進した女だからの言葉である。

「そんな事を言ってくれるのか」

良介の目に涙が滲んで来た。

同時に、良介の腕に力が入って、有希子を強く抱き締めた。

「ごめんよ．．．」

涙が頬を伝わった。

「うっん．．．」

有希子の目からは涙が溢れている。

「どうしたらいいんだ」

男として、こんなやるせない事はない。

いつかの出会いを大切に、有希子は良介を待っていた。

しかし、良介は他を見てしまい、有希子の存在を忘れてしまったのである。

「いいのよ．．．。良介、泣かないで。あなたの過去に私がいたという事だけで私は嬉しいわ。それに、良介と会って人を愛するという事はどういう事かよく分かったの」

木枯らしが、ビュツとまた吹いた。

良介は黙って聞いている。

「今までは良介の面影ばかり追っていて自分に遠慮してたの。でも、これからは自分の気持ちを素直に出せると思うわ．．．。涙が洒れるほど泣いた事もあったわ。しかし、それも私にとって大切な人生のページだったのよ。そのページーページが、これからは色の着いたページにしたいの。全ては良介と知り合ったために愛というものを知ったの。これからは泣かないページを増やして行けると思う。良介を忘れないためにも、そうして行くわ．．．。ありが

とう」

大切な人を失った悲しみはあるが、有希子は何かが吹っ切れたようである。

耳を澄ますと、師走の街にジングルベルが空しく響いていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7563i/>

有希子・その愛

2010年10月8日15時26分発行